

キャリアデザイン学研究科

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】（参考）

教育システムとして捉えると、1学科学部であるキャリアデザイン学部の advanced course に対応するキャリアデザイン学研究科（1専攻）の強みとして、教員間の意見交換や意識確認、諸施策の策定などが行いやすい、つまり機動性のある運用をしやすい学部・研究科と言える。自己点検・評価の各書類からは、その強みを生かした真摯な取り組みの様子が窺える。一方、キャリアデザイン学に関する高度な知識と実践・展開能力を備えた人材を輩出すべく研究教育活動を行っている当研究科が、質を落とさず入学者定員を確保し続けるためには、自らの教育目標の社会的な立ち位置・強み等を外部にアピールし続けることが重要と思われる。これについては、法政大学キャリアデザイン学会が有効に機能しており、今後もそういった強みが生かされ、2019年度に回復した定員充足率100%が今後も維持されることを期待する。また、長期履修制度の導入によって、今後の修了生の満足度がどのように変化するかについては、注目されることである。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2019年度も前年度から継続して教員間の意見交換に加え、大学院生の各学年から代表者を選出して執行部との連絡窓口とし、教育研究補助金の改正等の制度変更や、長期履修者の学習状況に関して情報交換やアンケート等を行い、必要な情報を研究科教授会にフィードバックし、教員間の主観的議論のみに依存しない、エビデンスに依拠した課題発見・問題解決を実行した。

法政大学キャリアデザイン学会は2019年度も計6回の研究会を開催し、内外の研究者や実務家との研究交流を継続している。また、大学院担当教員全員に学術研究データベースの更新を義務づけ、研究業績の公開をしている。

2020年度入試の定員充足率は85%であったが、これは最終合格者と次点者との間に総合点において十分な隔絶が見られたためであり、大学院教育の質の確保を優先した結果である。本研究科で研究を行うに足る能力を持つ応募者を確保するために、進学相談会と並行して研究計画書の作成に関する説明会を行い、参加者の全員が入学者ではないものの、志願者の質的向上のための1つの策としている。

本研究科の長期履修制度は2018年に導入されたばかりであり、長期履修者の学習状況に関しては未だ明確な傾向や課題は見られないが、在学期間の長期化に伴い、メリットのみならず、学習意欲の低下等の諸問題が発生する可能性は否定できない。そのため、先述の大学院生の代表者を通じた情報交換により長期履修制度利用者の状況の把握に努めている。また、定期的な懇親会の開催を通じて、大学院生同士の相互支援やメンタリング活動を活性化しうる環境を整えている。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

キャリアデザイン学研究科は、研究科における課題発見・問題解決について、正確に状況を把握し、エビデンスに依拠し、適切に実行している。また、年6回開催される法政大学キャリアデザイン学会では、学内外の研究者や実務家と継続的に研究交流を実施することで教育目標・教育成果を広く発信しており、高く評価できる。2020年度の定員充足率は、大学院教育の質の確保を優先させた結果85%にとどまったことに関しては、質の高い志願者の確保など引き続き方策が講じられることに期待する。長期履修制度は導入3年目を迎えるにあたり、制度利用者の学習状況の把握や課題発見に努められたい。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。

S A B

※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。

本研究科は①キャリア教育・発達プログラム、②ビジネスキャリアプログラムの2つのプログラムより編成され、各プログラムに対応するプログラム科目を設置している。また、コースワーク基礎科目、共通科目を設置し、そのうえでリサ

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>一ネットワークに対する個別指導（修士論文指導、演習）を行っている。教育課程を体系的に編成し、関心のある研究テーマを掘り下げることが可能となるように綿密に組み立てられている。</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・キャリアデザイン学研究科カリキュラム</p>	
<p>②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。</p>	<p>はい いいえ</p>
<p>【根拠資料】 ※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。 ・博士後期課程を設置していないため該当なし</p>	
<p>③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。</p>	<p>S A B</p>
<p>※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。 博士後期課程を設置していないため該当なし</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 博士後期課程を設置していないため該当なし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 博士後期課程を設置していないため該当なし</p>	
<p>④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。 【修士】 入学者・修了生アンケート等を活用して教育の状況を把握しており課題が生じた場合は研究科教授会の場で共有・検討し、教育内容の改善につなげるというプロセスを毎年実行している。また、社会の潮流や研究の動向も踏まえ、授業内で用いるテキスト、輪読論文の変更、講義スライドの変更など、各教員が教育内容を刷新している。また、これらを実効性のあるものとして実現するために、各教員が最先端の研究を行い、教育研究能力の研鑽に努めるとともに、その成果を公表している。 【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・大学院シラバス ・法政大学 学術研究データベース</p>	
<p>⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。 【修士】 外国籍の応募者は例年若干名であるが、現在のところ合格者は出ていない。従来から引き続き、性別・年齢・国籍を問わず、研究遂行能力に基づいて入学者を選抜する方針をとっており、入学試験において外国人留学生を優遇する策を導入する予定はないが、全学的に活用できるサポート制度を含め、外国人留学生が研究しやすい環境の構築については検討を続けていく。 教育内容に関しては、教員による国際比較研究や海外を対象とした研究が進められており、それらの研究成果に依拠した、グローバルな観点およびグローバル社会に関する知見に基づく教育も行われている。グローバル化に対する大学院生の関心も高く、海外、グローバル化をテーマとした修士論文が年に2～3点出ている。 【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・キャリアデザイン学研究科 研究成果集</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>・法政大学 学術研究データベース</p>	
<p>1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。</p>	
<p>①学生の履修指導を適切に行っていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※履修指導の体制および方法を記入。</p> <p>【修士】 入学直後のオリエンテーションの際、大学院要項、講義要項に基づいて、大学院での2年間の学習を展望した履修指導を行っている。また、修士論文構想発表会など本研究科独自のイベントの時期と趣旨を踏まえた研究のスケジュールに関する指導もオリエンテーションにて行っている。 個々の授業に関しては、毎年、入学オリエンテーションの場で全教員がシラバスに基づいて授業概要を具体的に説明し、履修指導を行っている。2020年度はオンラインでのオリエンテーションとなったため、授業概要はWebシラバスおよび学習支援システムに詳細な説明を掲載することで対応している。</p> <p>【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし</p> <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・キャリアデザイン学研究科シラバス ・新入生オリエンテーション資料</p>	
<p>②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ</p>
<p>※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導体制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HPや要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。</p> <p>【修士】 新入生オリエンテーションにおいて研究指導計画を書面にて配付している。併せて、修士論文提出に至る流れを口頭でも説明している。さらに、2019年度より研究指導計画を大学院ウェブサイトにて公表している。</p> <p>【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし</p> <p>【根拠資料】 ※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。 ・新入生オリエンテーション資料 ・大学院ウェブサイト(研究指導計画)</p>	
<p>③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ</p>
<p>※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。</p> <p>【修士】 新入生オリエンテーションにおいて、研究指導計画を新入生に書面にて配付し、口頭にて学位取得に至る過程を詳細に説明している。そして修士1年次の11月の指導教員の申請時期に合わせて修士論文のための研究の進め方に関するガイダンスを行っている。また、年3回（修士1年の修論構想発表会：1回、修士2年の研究構想発表会・修論中間発表会：2回）の修論構想発表会・修論中間発表会を全教員、全学生参加のもとで開催している。この発表会を、キャリアデザイン学研究科における院生の研究に対する集団指導の場としている。その後、研究計画に基づき、担当教員が個別に指導を実施し、修士論文作成指導を丁寧に実施している。これらの各種行事は毎年行っているものであり、当初のスケジュールに沿って実施できている。</p> <p>【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・新入生オリエンテーション資料 ・1年生対象11月ガイダンス資料（資料名：第1回修士論文構想発表会の位置づけ。10月配付） ・研究指導計画（2019年度に大学院ウェブサイトにて公表）</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。	
<p>【修士】 成績評価は各教員が責任をもち厳正に単位認定を行っている。論文審査については主査（1名）・副査（2名）が審査を担当し、口述試験後は審査結果を主査、副査で照合し、相互に率直な意見交換を行って厳正な最終評価を行い、可否を決定している。また、口述試験の際には、読み合わせにて教員間で学位基準の再確認を行い、適正な評価の実施に努めている。</p>	
<p>【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 2019年度は評点が11段階に増加したため、旧制度の評価基準との対応について教員間で議論し、新たな基準に関して共通認識を得た。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・キャリアデザイン学研究所 学位基準</p>	
②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。	
<p>【修士】 新入生オリエンテーションにて、配付資料に掲載する形で学位基準を文書にて配付し、口頭にて説明している。また、2019年度より大学院ウェブサイトにて学位基準を公表している。</p>	
<p>【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし</p>	
<p>【根拠資料】 ※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。 ・新入生オリエンテーション資料 ・キャリアデザイン学研究所 学位基準（2019年度中に大学院ウェブサイトに掲載予定）</p>	
③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
※箇条書きで記入※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。	
<p>修士論文提出者に対する学位授与率はほぼ100%である。2018年度に長期履修制度を導入したことによって修了年限の管理が複雑化したことにより、大学院事務と連携して名簿管理等を行っている。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 特になし</p>	
④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組み概要を記入。	
<p>【修士】 入学時の新入生ガイダンスにおいて学位基準を周知徹底させ、学習に取り組ませている。年3回の修士論文構想発表会・中間発表会の場において、厳しいフィードバックを行い研究科一丸となって、高い研究水準を維持する取り組みを実施している。 また、修士論文審査は主査（1名）、副査（2名）に加えて他の教員も参画し、審査結果は教授会全体で承認するという手続きで行っている。以上の形で、論文審査における適正性の確保と、学位水準の維持を実現する体制を構築している。</p>	
<p>【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・新入生オリエンテーション資料</p>	
⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

※責任体制及び手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入。

【修士】

原則として院生1名に対し1名の指導教員を配置し、指導教員の責任の下で論文の完成に至るまでの指導を行っており、対応すべき問題の発生時には教授会場で共有して対応している。また、学位授与基準に基づいた厳正な論文審査を行うことにより、学位水準を適正に維持する努力を常に行っている。修士論文審査は主査(1名)、副査(2名)に加えて他の教員も参画し、審査結果を教授会全体で承認するという手続きで行っている。このように、教授会全体として責任を負う体制のもとで論文指導および学位授与を進めており、この手続きは入学時のオリエンテーションおよび指導教員申請時のオリエンテーションにて、執行部から院生に対して説明している。

さらに、研究倫理に沿った実証研究を促進するため、研究科内に研究倫理委員会を設置しており、2019年度に倫理規程を制定し、必要に応じて大学院生の研究の倫理審査を行っている。

【博士】

博士後期課程を設置していないため該当なし

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

研究科の研究倫理委員会での倫理審査を適切に行うための研究倫理規程を制定した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・新入生オリエンテーション資料
- ・キャリアデザイン学研究所 研究倫理委員会規程

⑥学生の就職・進学状況を研究科(専攻)単位で把握していますか。

はい いいえ

※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。

キャリアデザイン研究科の学生は、現職を有する社会人のみであるため、入学時に勤務先、修了時には大学院の修了生アンケートにて現職の状況を把握している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・入試出願書類
- ・修了生アンケート(就労状況記入欄)

1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

【修士】

キャリアデザイン学研究所では、知識の吸収にとどまらず、講義や演習、修論構想発表会・修論中間発表会などの機会を通じて、学術論文のサーベイ能力、レポート能力、プレゼンテーション能力、論理的思考能力、問題解決能力など、より専門的なニーズに応えうる能力の開発に力点を置いている。そうした能力の応用的定着とその成果を把握するべく、講義や演習、修論構想発表会・修論中間発表会などを通じて、知識の吸収にとどまらず、多様な研究発表の機会を与えることで、研究の進捗、能力の向上を適宜、測定している。また、必要に応じて研究科教授会にて教育上の課題について議論している。

【博士】

博士後期課程を設置していないため該当なし

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・院生・修了生の学会発表、論文一覧

②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ループリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。

【修士】

各授業内では個別の研究発表、討論、事例研究発表、課題提出などを実施し、学生に多様な研究発表の機会を与え、授業の理解度、その成果等を随時把握している。年3回の修論構想発表会・修論中間発表会においては、研究の進捗度や研

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>究の深化レベル、研究の質を定期的に把握し指導を行っている。そのほか、修了生の学会発表、学会誌への論文投稿、出版物、実務における特記すべきプロジェクト実績なども、大学院での学習、研究成果を測定するための1つの指標としている。</p>	
<p>【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし</p>	
<p>1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。</p>	
<p>①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。 【修士】 研究科内に設置した質保証委員会や定例教授会において、随時、学習成果の検証とそのフィードバックについて意見交換や問題提起を行い、教育の改善・向上に向け、研究科の質保証を意識した取り組みを実施している。個々の授業や演習をはじめ、修論構想発表会・修論中間発表会などの機会において、院生の理解度、研究進捗度をはかり、絶えず教育内容、教育方法の刷新に努めている。</p>	
<p>【博士】 博士後期課程を設置していないため該当なし</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし</p>	
<p>②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※取り組みの概要を記入。 学生による授業改善アンケート結果を執行部にて検証し、課題を発見した場合は内容を教授会において全教員で共有し、各教員に結果をフィードバックしている。教育成果、教育内容・方法などの改善内容を教授会にて議論し、組織的に学生からの授業改善アンケート結果を有効に活用し、絶えず教育、指導の質的向上に努めている。</p>	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 特になし</p>	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<p>・個々の教員による講義、演習に加え、修論構想発表会（2回）・修論中間発表会といった集団指導の機会が確保されていることで、学習成果の把握が促進され、それをもとに教育の改善・向上が行われていくというプロセスが長所・特色と言える。</p>	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>・特になし</p>	

【この基準の大学評価】

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

キャリアデザイン学研究科の掲げる教育理念に基づき、教育課程は2つのプログラム「キャリア教育・発達プログラム」「ビジネスキャリアプログラム」において編成され、各プログラムに対応する科目は適切に配慮されている。また、コースワーク基礎科目、共通科目の設置、個別指導によるリサーチワークが行われ、体系的に編成されている。また、修論構想発表会や中間発表会といった集団指導の機会も適切に確保されていることで、学習成果の把握が促進され、それをもとに教育の改善・向上が行われていくというプロセスが特色と言える。

教育の状況はアンケートなどを活用して把握され、その情報は研究科教授会において共有・検討が適切に実施されている。グローバル化推進に関しては、教員による国際比較研究や海外を対象とした研究の実施、学生の関心の高まりがみられるものの、留学生の受け入れは達成できておらず、質の高い外国籍の学生を獲得するための方策を講じることに期待したい。学生への履修指導、研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導は適切に実施され、成績評価、単位認定及び学位授与も厳正に行われている。研究の進捗状況や成果、研究の質は研究科内に設置された質保証委員会や定例教授会において意見交換がなされ、情報の共有、検証、問題提起など研究科の教育改善、質保証を強く意識しており、優れた取り組みである。

2 教員・教員組織

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①研究科（専攻）独自のFD活動は適切に行われていますか。	S A B
<p>【FD活動を行なうための体制】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 法政大学キャリアデザイン学会を独自に開催しており、広く学外にも公開しキャリア関連の研究者、実務家など先端的な研究業績を有する研究者等を講演者に招聘し、学会活動を積極的に推進している。教員、院生、修了生、学内外の人々などと相互の自己研鑽を積極的に促進している。 <p>【2019年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 6回の研究会を開催。詳細は法政大学キャリアデザイン学会ウェブサイト参照 <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 特になし <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 法政大学キャリアデザイン学会ウェブサイト 	
②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	S A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>研究・社会貢献活動の活性化には時間の確保が必要条件との考えから、各行事の担当者を段階的に削減していく方針である。現状としては、研究活動のための学外活動は積極的に奨励しているが、各行事の担当者が不足するケースもあり、大学院の運営業務と研究活動・社会貢献活動との両立は課題である。学事の運営に支障のない範囲で、各種委員会の代理出席等により、各教員の活発な活動が可能な環境づくりに努めている。</p> <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 行事の担当者（出席必須の担当者）の削減を段階的に行っている。2019年度は懇親会の参加者を1名削減した。2020年度は進学相談会担当者を1～2名削減する予定である。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 特になし 	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> 高度な専門性、豊富な研究業績を持つ研究者がバランスのとれた年齢構成のもと、カリキュラムに適合的な教員組織を編成している。FD活動、研究活動においては、特に法政大学キャリアデザイン学会の取り組みが大きな意義を有している。また、日常の業務においても教員の資質の向上を可能とする環境の構築に努めている。 	

(3) 問題点

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

キャリアデザイン学研究科では、高度な専門性、豊富な研究業績を持つ研究者がバランスのとれた年齢構成のもと、カリキュラムに適合した教員組織が編成されている。研究科独自のFD活動は、年6回開催される法政大学キャリアデザイン学会において広く学外にも展開する形で行われており、学内外の情報の相互活用を可能とし、優れた取り組みである。研究活動や社会貢献などの活性化や資質向上に関しては、教員の運営業務との両立が課題となっており、引き続き業務配分の検討など環境の構築が必須で、今後の取り組みに期待する。

III 2019 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
1	中期目標	プログラム制による体系的なカリキュラムを通じた専門性深化の継続と浸透。	
	年度目標	カリキュラム全体（基礎・共通科目、プログラム科目、演習）の運用状況の把握、問題の発見と解決に加え、eLCore を活用した研究倫理教育を徹底する。	
	達成指標	現状では授業アンケート等で深刻な苦情・問題点は見られないが、今年度も引き続き、アンケート等によりカリキュラムの運用状況の把握、問題の発見を行う。研究倫理教育に関しては、次年度に演習を履修する修士1年生 eLCore 修了率 100%を目標とする。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	9月に開催した院生の会合に執行部が参加し、授業や学習環境に関する意見聴取を行った。研究倫理教育は、次年度に演習を履修する院生全員が eLCore を修了した。以上より目標は達成したといえるが、修士1年生の学習成果に関しては継続観察が必要であることから評価はAとした。
		改善策	対面およびメーリングリスト、アンケートフォームを活用し、カリキュラムや学習環境、授業に関する意見聴取を継続的に行い、問題の発見と改善策の検討に努める。研究倫理教育に関しても、その重要性に関する啓発と eLCore 受講の徹底を継続する。
質保証委員会による点検・評価			
所見	教育課程・内容に関して、院生からの意見聴取が効を奏したと考えられるため、教授会執行部の評価と同様、一定の目標を達成したと評価してよい。研究倫理教育に関しても、院生全員が修了したため、評価に値する。		
改善のための提言	教授会執行部が述べるように、複数の方法を活用し、問題の発見と改善策の検討を行うことが必要である。とりわけ、アンケート等だけでなく、対面での意見聴取は重要と考えられる。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
2	中期目標	研究科開設から5年という節目において、より一層の教育研究指導方法の向上を図る。	
	年度目標	前年度に引き続き、シラバス通りの授業実施の徹底と、マンツーマンでの修士論文指導体制および年3回の修論発表会を実施し、対処すべき課題が生じた際には迅速かつ適切に対応する。	
	達成指標	大学院生の研究計画に基づいて修士論文指導教員を適切に配置し、ミスマッチのないマンツーマン指導体制を確立する。授業上で対処すべき課題は授業アンケート等で把握し、適宜、研究科内での情報共有と対応を行う。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由	入学時ガイダンス及び各授業開講日にシラバスに基づく授業説明を行い計画的に授業を実施した。前年度の長期履修者の存在と定員の完全充足ゆえ来年度の修士論文指導履修者が教員数を超え、完全なマンツーマン体制はとれなかったが、ミスマッチ防止のため事前に		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

			教員の専門性等に関する情報提供を充実化したこともあり、院生からの納得は得られ不満・苦情は出されなかった。
	改善策		修士論文の指導教員申請に際して事前に行った教員の研究テーマ、研究方法に関する情報提供は院生から好評であり、今後も継続する。今年度は修士論文執筆に際して研究計画が大幅に乱れる事例は見られなかったが、院生の大半が仕事と両立していることもあり、適切かつ柔軟な研究計画の作成と進捗管理を今後も徹底し、問題が発生した際には教授会等で共有していく。
		質保証委員会による点検・評価	
	所見		マンツーマン指導におけるミスマッチ防止が重要な点であったが、教授会執行部が評価するように、教員側と院生側のマッチングにおける大きな不満・苦情は寄せられなかった。またその他の点においても、教育方法上の深刻な不備はなかったため、一定の目標は達成したと評価できる。
	改善のための提言		教授会執行部も述べるように、教員の専門性に関する情報提示等が一定の効果があったことが推測されるため、今後も継続するとよいと評価できる。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
	中期目標	修了生の学会発表、学会誌への投稿等の継続的促進を図る。 研究科修了生のレベルの維持・向上を図り、高度職業人養成機関としての本研究科の社会的地位の継続的な向上を図る。	
	年度目標	大学院生の学習状況を把握し、十分な学習成果を出せるよう支援する。また、修了生のうち優れた研究を行った者については学会での研究発表、学会誌への論文投稿等の促進を継続するとともに、修了生の研究成果の実務界への還元も推奨、促進する。	
	達成指標	年3回の修士論文検討会等において、研究の進捗状況の把握と助言を行い、研究水準を理由とする修了試験不合格者の発生を防ぐ。また、学会発表、論文発表その他研究成果の社会還元の実績に関する情報を研究科内で共有し、Web サイト、シンポジウム等で広く公表する	
3	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	年3回の修士論文検討会を計画通りに実施し、進捗状況の把握と助言を行った。また、本年度の口述試験においては、修士論文提出者の全員が学位論文として十分な質に達しており、研究水準を理由とする修了試験不合格者は出なかった。研究成果の公表・社会還元については下記「社会貢献・社会連携」の欄を参照
		改善策	指導教員による日々の指導と年3回の修士論文検討会を通じた他の教員からのフィードバックの成果により、研究水準の不足を理由とする修了試験不合格者は出なかったが、学界全体の研究水準が向上していく中で修士論文の質の一層の向上を図るためには、指導教員自身の研究能力の継続的な研鑽により、院生への指導力を高めていくことが必要である。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	学習成果に関して、まず、修士論文作成段階における検討会では、活発な意見交換が十分になされた。さらに、提出された修士論文に関しては、全てが合格する水準であった。以上より、一定の目標は達したと評価できる。
		改善のための提言	指導する側の教員個々の研究能力を向上させるのは非常に重要である。その反面、組織として個々能力の向上にいかに対応するか、課題が残る。新規の教員採用が近いうちに話題となるだろうが、どのような専門性の人物を採用するか、重要な検討事項であり、事前の議論が必要と考えられる。
No	評価基準	学生の受け入れ	
4	中期目標	学生募集はホームページ、パンフレット、入学相談会、大学院シンポジウム、研究計画書説明会など、あらゆる機会を通して入学志願者に詳しい入試情報を提供してきており、このような取り組みをいっそう充実させる。	

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度目標	定員の充足率に関しては、過去5年間平均で90%以上を継続しており、2019年は100%を達成した。従来より、合格基準点を下げることなく質を厳しく担保しつつも定員充足率を適正に管理してきており、こうした充足率管理を継続していく。	
	達成指標	引き続き100%の定員充足率を目標とするが、合格基準点を安易に下げることなく、書類選考、筆記試験、口述試験による研究遂行能力の評価に基づいて厳格に入学者を選抜し、質の高い教育の確保・徹底に努める。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
	自己評価	A	
	理由	2度の進学相談会を実施し、個別相談形式での入学相談に対応した。定員充足率に関しては、質の高い教育の確保・徹底のため、人数合わせではなく合格基準点に忠実な選考を行った結果、85%にとどまった。	
	改善策	本研究科は定員充足率のみならず合格基準点の順守による教育の質の確保も最優先事項としており、今後も両者を勘案した選抜を行っていく。専攻の客観性を最大限に確保するため、現在行っている採点後の教員間でのミーティングを通じた合否確定は今後も継続していく。	
	質保証委員会による点検・評価		
	所見	入学希望者が一定数いたことは評価に値する。教授会執行部も述べるように、100%に達しなかったのは、入学する院生の水準を高く保持するためであり、妥当な判断だったと評価できる。	
	改善のための提言	100%を達成することを優先させるのか、それとも水準の確保を優先させるのか、今後も検討が必要である。当研究科における重要課題の1つとして、今後も教授会で議論することが必要であり、入学定員の見直しも考慮すべきであろう。	
No	評価基準	教員・教員組織	
5	中期目標	当研究科では2011年に大学院担当教員の基準を明確化し規定を整備している。規定に基づき適切に教員募集・任免・昇格を行うことを継続していく。	
	年度目標	定年退職者の補充、学部科目担当との調整に対応した教員配置は2018年度に完了している。本年度は教員組織の質的向上を目標とし、各教員の、法政大学キャリアデザイン学会等における相互研鑽と、各種学会への参加、論文発表を通じた自己研鑽と成果発現に努める。	
	達成指標	教員配置に関する課題を継続的にモニタリングし、必要に応じて対処を行う。教員の研究成果に関しては、質の確保という点から単純な数値目標を追求することは適切でないが、本研究科のカリキュラムに関連する幅広い観点からの研究を奨励し、状況のモニタリングとして、各教員の研究実績に関する情報を共有する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	教員配置に関しては、サバティカル教員の代講教員を含めて適正かつ十分な配置を継続している。次年度のサバティカル教員の代講教員の採用も完了している。教員の研究成果は学術研究データベースおよび学部紀要への掲載により共有している。
		改善策	現在のところ教員配置に関する課題は見られないが、継続的に課題をモニタリングし、必要に応じて対処を行う。次年度末に専任教員の定年退職者が出るため、学部と連携し、適任者の採用を実現する。
質保証委員会による点検・評価			
所見	教員配置に関しては人数、指導能力共に十分な水準を維持しており、また長期履修者の発生による不確定要素にも現在の所、上手く対応出来ていると評価できる。		
改善のための提言	長期履修者の増加に伴い、一部教員に指導担当が重複する問題が考えられるが、学生の希望と教員の負担のバランスをどのように考えるのか、例えば担当学生数に応じた手当を設けるかといった対策についての検討が必要と考えられる。		
No	評価基準	学生支援	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

6	中期目標	社会人院生が実務と研究のバランスをとっていく上でのアドバイスや、修士レベルの論文を書くのが初めての院生に対する、学術的調査研究の取り組み方・心構えの指導など、全教員がいつそうきめ細やかな対応を行っていく。	
	年度目標	今年度より長期履修制度利用者が第2年次に入ることを受け、修士論文指導を履修していない2年次以降の大学院生に対し、学習の継続状況を把握し、修士論文指導までの学習方法等に関して必要十分なフォロー体制を構築する。	
	達成指標	従来より各学年から代表者・連絡係を選出して各種の連絡を行ってきたが、長期履修中の院生（演習を履修していない2年次以降の院生）からも同様に担当者を選出し、定期的な状況把握や学習機会の提供を行う。また、この体制をルーティン化できるよう、課題の把握も行う。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	従来より選出していた各学年の代表者・連絡係に加え、長期履修中の院生（演習を履修していない2年次以降の院生）からも同様に担当者を選出し、定期的な状況把握や学習機会の提供、アンケートの実施等を行い、日常のコミュニケーションでは得られない情報も収集できた。
		改善策	今年度はメーリングリストを活用して行い、特に問題は見られなかった。しかし、Slack等の活用が進みメールの使用頻度が減っている院生もおり、今後は対処が必要になる可能性がある。また、長期履修者への対応を仕組化したことにより執行部の業務は増加しており、今年度の円滑な実施が連絡係の能力・適性による属人的なものである可能性は認識しておく必要がある。
質保証委員会による点検・評価			
	所見	社会人院生ということで執行部からの連絡が届きにくい状況もあるが、院生間でのインフォーマルなネットワークによってそれが補完されており、大きな問題は生じていない点は評価できる。	
	改善のための提言	長期履修者や秋学期修了者が学生間のネットワークから抜け落ちてしまい、情報が届かないといった問題が考えられるので、その対応策を検討すべきであると考えます。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
7	中期目標	キャリアデザイン学は理論に裏付けられた実学であり、高度な専門職を目指す院生の学習ニーズに応えるのと同時に、社会の人材ニーズにも対応していくことに力点を置く。	
	年度目標	大学院修了者および教員の研究成果を学会、学術雑誌にて発信し、キャリアデザイン学の知見を広く社会に提供する。また、大学院修了者による、研究成果の実践への還元も推奨していく。	
	達成指標	大学院修了者および教員により、研究成果を学会や学術雑誌で発表するのみならず、研究実績および実践への応用実績をウェブサイトやシンポジウム等で広報し、研究成果の社会還元・普及を促進する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		大学院修了生の学会発表、論文発表その他の研究成果の最新の状況に関する情報を収集し、研究科のWebサイトを更新して情報を反映した。教員の研究成果は学術研究データベース上で年に最低1度は更新し、さらに、学部紀要にも年間の研究業績を掲載している。	
	改善策	ハゲタカジャーナル問題への世間の注目もあり、リスク管理という点から今後は公表する業績の限定や院生・修了生への注意喚起が必要である。しかし、査読制のハゲタカジャーナルの特定および査読無し論文との業績価値の比較を客観的に行うのは現状容易ではなく、対応策を今後検討していく必要がある。	
	質保証委員会による点検・評価		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	所見	院生の研究成果を研究科の web サイト等で発信していくことにより、研究科の活動を積極的に外部に発信していることは評価できる。特にハゲタカジャーナルを排除する為の施策を行っている点は、研究成果の水準を高める効果があるという点でも評価できる。
	改善のための提言	研究科としての責任が修士論文を仕上げるまでと考えがちであるが、投稿論文や学会発表と言う形で外部に公表することを研究科としても推進していくといった取り組みの余地が残されていると考える。

【重点目標】

目標：学生支援

今年度より長期履修制度利用者が第2年次に入ることを受け、修士論文指導を履修していない2年次以降の大学院生に対し、学習の継続状況を把握し、修士論文指導までの学習方法等に関して必要十分なフォロー体制を構築する。

施策：各学年および長期履修中の院生のそれぞれから代表者・連絡係を選出し、メーリングリストを作成して各種の連絡を行う。各種行事等の連絡事項を伝達するのみならず、定期的に状況把握や学習機会の提供のための連絡を行い、必要に応じて対策の考案、サポートの提供を行う。また、長期履修者の学習等に対処すべき問題が生じた際には速やかに教授会にて検討する。

【年度目標達成状況総括】

長期履修制度利用者を含めた大学院生全体へのフォロー体制を充実化し、情報の提供、学習状況の把握や意見聴取を円滑に行うことができた。具体的には、定期的に行っている研究発表会でのコミュニケーションのほか、院生の自主勉強会の場を利用した対面での学習相談に対応した。また、大学院生への補助金制度の変更など、院生の利害に影響を与える事項については、必要に応じて独自にアンケート調査や対面での説明を行い、授業や学習環境に関する意見・希望を聴取するとともに、変更事項に関する納得感の醸成も実現した。これらのコミュニケーション体制と、問題の把握と教授会での共有は今後も継続していく。

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

キャリアデザイン学研究科の2019年度目標の達成状況はプロセス、達成度ともに概ね適切である。学生の受け入れに関しては、定員を満たせなかったが、学生の数と質の確保のどちらかを優先させるかについてどのように考えるのか、また、その対策について今後も検討が望まれる。2年目となった長期履修制度利用者に対する学習の状況把握、フォロー体制の強化・構築に関しては、適切かつ具体的に実施されており、一定の効果を示している。今後も適切な対応を期待したい。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	プログラム制による体系的なカリキュラムを通じた専門性深化の継続と浸透。
	年度目標	オンライン授業では対面と変わらぬ授業の質と教育効果の確保を目指す。カリキュラム全体（基礎・共通科目、プログラム科目、演習）の運用状況の把握、問題の発見と解決に加え、eLCoreを活用した研究倫理教育を徹底する。
	達成指標	今年度も引き続き、アンケート等によりカリキュラムの運用状況の把握、問題の発見を行う。オンライン授業に関しては適宜、院生と情報交換・状況把握を行う。研究倫理教育に関しては、次年度に演習を履修する修士1年生 eLCore 修了率 100%を目標とする。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	研究科開設から5年という節目において、より一層の教育研究指導方法の向上を図る。
	年度目標	前年度に引き続き、シラバス通りの授業実施の徹底と、マンツーマンでの修士論文指導体制を徹底する。および年3回の修論発表会を実施し、対処すべき課題が生じた際には迅速かつ適切に対応する。
	達成指標	大学院生の研究計画に基づいて修士論文指導教員を適切に配置し、ミスマッチのないマンツーマン指導体制を確立する。授業上で対処すべき課題は授業アンケート等で把握し、適宜、研究科内での情報共有と対応を行う。発表会の対面形式での開催が困難な場合はオンラインでの発表とフィードバックを行う
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

3	中期目標	修了生の学会発表、学会誌への投稿等の継続的促進を図る。 研究科修了生のレベルの維持・向上を図り、高度職業人養成機関としての本研究科の社会的地位の継続的な向上を図る。
	年度目標	大学院生の学習状況を把握し、十分な学習成果を出せるよう支援する。また、修了生のうち優れた研究を行った者については学会での研究発表、学会誌への論文投稿等の促進を継続するとともに、修了生の研究成果の実務界への還元も推奨、促進する。
	達成指標	年3回の修士論文検討会等において、研究の進捗状況の把握と助言を行い、研究水準を理由とする修了試験不合格者の発生を防ぐ。また、学会発表、論文発表その他研究成果の社会還元の実績に関する情報を研究科内で共有し、Web サイト、シンポジウム等で広く公表する。
No	評価基準	学生の受け入れ
4	中期目標	学生募集はホームページ、パンフレット、入学相談会、大学院シンポジウム、研究計画書説明会など、あらゆる機会を通して入学志願者に詳しい入試情報を提供してきており、このような取り組みをいっそう充実させる。
	年度目標	定員の充足率は過去5年間平均で90%台であり、2018年は85%であった。数値上は100%を目標とするが、従来より、合格基準点を下げることなく質を厳しく担保しつつも定員充足率を適正に管理してきており、こうした充足率管理を継続していく。
	達成指標	引き続き100%の定員充足率を目標とするが、合格基準点を安易に下げることなく、書類選考、筆記試験、口述試験による研究遂行能力の評価に基づいて厳格に入学者を選抜し、質の高い教育の確保・徹底に努める。
No	評価基準	教員・教員組織
5	中期目標	当研究科では2011年に大学院担当教員の基準を明確化し規定を整備している。規定に基づき適切に教員募集・任免・昇格を行うことを継続していく。
	年度目標	求人内容について学部とも調整のうえ、定年退職者の補充のため1名の新規採用を行う。本年度は教員組織の質的向上を目標とし、各教員の、法政大学キャリアデザイン学会等における相互研鑽と、各種学会への参加、論文発表を通じた自己研鑽と成果発現に努める。
	達成指標	春学期中または年内に新任教員1名を採用する。また、教員配置に関する課題を継続的にモニタリングし、必要に応じて対処を行う。教員の研究成果に関しては、質の確保という点から単純な数値目標を追求することは適切でないが、本研究科のカリキュラムに関連する幅広い観点からの研究を奨励し、状況のモニタリングとして、各教員の研究実績に関する情報を共有する。
No	評価基準	学生支援
6	中期目標	社会人院生が実務と研究のバランスをとっていく上でのアドバイスや、修士レベルの論文を書くのが初めての院生に対する、学術的調査研究の取り組み方・心構えの指導など、全教員がいっそうきめ細やかな対応を行っていく。
	年度目標	新型コロナ対応に伴う学事日程・行事運営方法の変更等に関しては可及的速やかに院生に情報提供を行う。また、対面の交流が持てない状況下で学年を越えた交流機会を設けるため、院生用のSlackを立ち上げ、教員の緩衝なしに自由に情報交換ができる非公式な場を構築する。
	達成指標	対面でのコミュニケーションが取れないがゆえに生じうる連絡の不備や学習上の不便による問題を未然に防ぎ、やむを得ず問題が生じた場合は迅速に解決に努める。例年通りの院生支援を提供できることを目指し、非対面であるがゆえに生じた問題に起因するトラブル・退学の発生を防ぐ。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
7	中期目標	キャリアデザイン学は理論に裏付けられた実学であり、高度な専門職を目指す院生の学習ニーズに応えるのと同時に、社会の人材ニーズにも対応していくことに力点を置く。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

年度目標	大学院修了者および教員の研究成果を学会、学術雑誌にて発信し、キャリアデザイン学の知見を広く社会に提供する。また、大学院修了者による、研究成果の実践への還元も推奨していく。
達成指標	大学院修了者および教員により、研究成果を学会や学術雑誌で発表するのみならず、研究実績および実践への応用実績をウェブサイトやシンポジウム等で広報し、研究成果の社会還元・普及を促進する。

【重点目標】

今年度は春学期に対面式授業が行えず5月の段階でも収束の状況が見えない中で、オンラインで授業を行うためのツールを駆使し、例年の対面授業と遜色のない質での授業の実施と教育効果の実現を目標とする。目標達成の基準として、授業のオンライン化など新型コロナ対応に起因する院生の学習環境の悪化や学習意欲の低下を防止して予定通りの修了につなげるとともに、同対応に伴う退学者の発生を防止する。

【目標を達成するための施策等】

授業に関しては、研究科として一律の実施方法を定めず、科目の性質や履修者の受講環境（勤務の状況、インターネット接続環境等）に配慮し、授業ごとに最適な方法で実施する。実施方法とそれに伴う課題や参考になる点などは教授会等の場において情報を共有して授業の品質の維持・向上に活用する。また、院生同士のサポートも例年通りに近い状況をつくるため、院生専用のSlackを立ち上げて情報交換や交流、サポートの場を設け、学習上の不便や、自宅学習に伴う不安感や孤立感を防止する。

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

キャリアデザイン学研究科の各評価基準における2020年度中期目標・年度目標（重点目標）は、現状分析を踏まえており、達成指標を含め概ね具体的かつ適切である。学生支援において、質保証委員会からの改善提言として挙げられていた長期履修者や秋学期修了者へのフォロー等については、年度末での改善報告に期待したい。

重点目標では、新型コロナウイルスの感染拡大の影響による対策として、オンライン授業を行うための様々なツールを駆使し、教育効果の質の維持を目標に、学習環境の悪化、学習意欲の低下を防止するための施策が具体的に示され、適切な取り組みである。

【大学評価総評】

キャリアデザイン学研究科は、開設以来、社会的ニーズの多様化や高度化に応え、「キャリアデザイン学」における高度な専門教育・研究活動を実現し、その活動は積極的に発信されており、高く評価できる。研究科における2020年度自己点検・評価における各項目については、問題点や課題を把握し、エビデンスに基づいた適切かつ具体的な対応策がとられている。長期履修制度に関しても同様に、制度利用者の学習状況の把握や課題発見に努めており、導入3年目を迎えた制度の今後の展開に期待したい。大学院教育の質の確保という前提を保ちつつ、定員充足率を適正に管理するため、継続的な検討が求められる。

2020年度目標は、概ね具体的かつ適切に設定されているが、年度末の執行部や質保証委員会で提言された改善策については、次年度の目標に明確に示されることが望まれる。

今後の貴研究科のさらなる発展に期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。